



# 結婚を機に考える ライフプラン

ライフイベントで考えるライフプラン 第1回

こんにちは、ファイナンシャル・プランナーの八ツ井慶子です。今回から4回にわたって「ライフイベントで考えるライフプランニング」についてお話をさせていただくことになりました。どうぞよろしくお願ひいたします。

「お金」の話というと、どうしても計算でガチガチに考えてしまいがちですが、実はそうでもありません。例えば家計簿をつけていても、なかなか家計改善しない、ということはないでしょうか？ この答えにヒントが隠されています。

「数字」はいかようにでも計算できます。しかし、家計の場合、その数字の背景にはみなさんの「生活」があります。つまり、生活スタイルの結果が数字としてあらわれているものが「家計」なのです。ということは、家計改善とは生活スタイルレベルまで落とし込んで考えないと、その結果としての数字は変化させられないのです。

これからお話することは、数字のお話のようで、その中身はみなさんの生活のお話です。ですから、数字を追っかけるばかりではなく、「自分だったら、いくらくらいだろう」「どんな生活を描きたいだろう」といったように、常に「自分の生活」に置き換えながら読み進めていただけるといいかなと思います。

さて、前置きが長くなりましたが、本題に入りましょう。第1回目のテーマは「結婚」です。結婚を機にご相談に来られるケースは珍しくありません。どんな点に気を付けてライフプランングしたらいいでしょうか、一緒に考えていきましょう。

## 妻の働き方がネックに

家計管理の究極のポイントは、「収支のバランス」に尽きます。収入以上に買ったものがあればストレスを生みますし、実



### 八ツ井 慶子

生活マネー相談室 代表  
ファイナンシャル・プランナー  
(CFP® 認定者)、宅地建物取引士

【やつい・けいこ】

埼玉県出身。法政大学経済学部経済学科卒業。2001年4月より「家計の見直し相談センター」の相談員としてFP活動を始める。'13年7月に独立し、「生活マネー相談室」を設立。個人相談を中心に、講演、執筆、取材などの活動を展開。これまで1000世帯を超える相談実績をもち、「しあわせ家計」づくりのお手伝いをモットーに活動中。城西大学経済学部非常勤講師、(社)日本証券アナリスト協会検定会員。著書は『レシート〇×チェックでズボラなあなたのお金が貯まり出す』(2014年、プレジデント社)等多数。

際買っていたら、家計は破たんしてしまいます。逆に収入の範囲内で暮らせれば、本来的に分かっていても、実際はなかなか難しいのはさきほどお話しした通りで、ですからご相談も絶えないのですが。

では、結婚した時点での「収支」にどのような特徴があるのでしょうか。それはよくも悪くも選択肢が多い、という点です。

まず、収入について考えてみましょう。昨今、「主夫」という言葉がよく使われるようになったものの、相談現場ではまだまだ夫は働くものの、妻が働くかどうかは妻しだい、という家庭は多いです。となると、結婚後の世帯収入のカギを握るのは妻です(もちろん夫の収入水準も同時にネックになります)。

妻が将来にわたって働き続けるかどうかは、その「家計」のあり方に大きく影響を及ぼします。あらためて言うまでもなく、

家計管理のポイントには収支バランスなので、その大元である（妻の）収入をどう見込むかは、その後のライフプランを決定させるのにネックになります。

妻の働き方もいろいろあると思いますが、仮に3つの選択肢を考えてみましょう。

①まったく働かない、②パートタイム雇用（夫の扶養の範囲内）で働く、③正規雇用として働く。①③のパターンで妻の収入をざっくり計算してみたいと思います。単純比較できるように、妻の収入に変動はないと想定し、35歳から60歳までの25年間を想定してみますと、

- ①ゼロ
  - ②年収100万×25年＝2500万円
  - ③年収400万円とすると、手取り年収は約320万円
- 320万円×25年＝8000万円



③の場合、さらに退職金の上乗せも考えられますが、それをのぞいたとしても、妻の働き方によって、家計収入は相当に差が生じるのはお分かりいただけるでしょう。

①と③では8000万円もの差です。これだけ差が出れば、どうしたってライフプランにも相当の違いが出ます。

「お金があれば人生ハッピー」というわけでは決してありませんが、こうした違いを結婚した時点で、夫婦で共有することはとても大事なことだと思います。単純に妻の働く意欲の向上につながるかもしれませんが、妻の収入が家計に与える恩恵を考えて、夫の協力もおおきくなるかもしれません。

いずれにしても、収入の変動はそのまま「支出」のプランに影響します。繰り返しになりますが、お金の使い方は生活スタイルを表しますから、ひいては人生設計に大きく影響するという事です。

### 妻が働くこと、ムダ遣いが増える？

私の相談の経験上、収入が高くなると、支出も膨らみます。

何を当たり前のことをいっているのだからかと思われるかもしれませんが、でも、冷静に考えてみていただきたいのです。収入が増えて、その分支出も増えたとすると、それはもしかすると、お金があるからという理由で増えた支出かもしれません。つま

り、お金（収入）に合わせた生活をしているということなのです。

となれば、増えてしまった支出は本当にあなたの人生にとって必要な買い物ではない可能性があります。この状態で収入が減ると、すぐに支出を削らないといけなくなり、生活レベルを落とすストレスを抱えるばかりか、状況変化に対応できない脆弱な家計にもなりやすいのです。度がすぎれば、「もっとも」となって、収入以上の消費行動を起こしたくなり、最悪の場合は家計を破たんさせかねません。そこまでではなくても、「年収が高くて、必ずしも貯蓄が多くあるとは限らない」のはこうした衝動が理由の一つに挙げられるでしょう。

マイナス面ばかりをお話してしまいましたが、そもそも収入が増えることは、人生の選択肢が増えることにつながります。基本的には、やはりありがたいことです。例えば、子供を多く欲しい、海外へ留学させたい、一軒家を建てたい、旅行へたくさん行きたい、高級車に乗りたい等々。すぐにいくつも思い浮かぶのではないのでしょうか。

ということ、収入があるほど、ムダ遣いも誘発されやすいからこそ、よりメリハリが大事だということです。あれもこれもではなく、しっかりと優先順位をつけて、夫婦で将来設計を立てたいものです。

こうしたプランニングの際には、夫婦がどうしたいかを一緒に考えることが大切で

す。そして、このとき相談現場でテーマになりやすいのが教育費と住宅購入です。

## 教育費

教育費は、親の「感情」が「勘定」にあらわれやすい最たる費目だと感じます。教育費はかかるものだといわれますが、私の相談業務の実感としては「かけるもの」といった方が適当な気がします。

もちろん最低限にかかる費用はあると思いますが、公立や私立といった選択から、塾や習い事といったものは親の思いが反映されやすいでしょう。

誤解いただきたくないのは、それがいいとか悪いとか、良し悪しをいうつもりはありません。価値観が反映されやすい費用であることを認識しておきましょう、ということです。

逆にいうと、子供の教育プランについて夫婦間で意見が合わず、言い争いの火種になることも残念ながらあります。結婚して具体的に教育プランを立てる過程で、お互いの考えを知る、なんてこともあるかもしれません。

金銭的な面からいえば、公立に通い、できるだけ塾や習い事をしない方が親孝行です。とはいえ、そうならなかったときに家計は大きく軌道修正をせまられます。想定していないことが起きたとき、家計が対応できなくても困ります。



そもそも人生には想定外はつきものですから、プランニングの際は、夫婦の考えを反映させつつも、厳しめのプラン、つまり支出が多くなるプランもある程度想定しながら検討しておくといいでしょう。あまり厳しすぎて現実的でないのも困ります。希望的予測だけのプランニングも心細いものです。さまざまなパターンでシミュレーションすることをお勧めします。

公立・私立もさることながら、そもそも子供を何人想定するかでも、家計は大きく変化します。

実際に私が経験した相談で、「今日の相談結果だけで、3人目を生むかどうか決めたと思います」といわれたことがあります。さすがにその責任の重さに緊張した記憶があります。しかも、1度ではありません。あるいは、「妻が4人目を妊娠しました。生んで大丈夫かどうか相談に来ました」というケースもありました。個人的には教育費を気にせず、生んでほしいなと思います。なかなかそうはいかない現代社会なのかもしれません。

文部科学省の「子供の学習費調査」等によると、幼稚園から大学までオール公立で約766万円、オール私立では約2170万円。幼稚園私立、小・中学校公立、高校、大学が私立だとすると、約1183万円。すべて塾や習い事も含めていて、大学は自宅通学の場合です。あくまで平均値ではありますが、公立か私立でざっくりこれだけの差があること、子供の人数に応じてこれだけの単位で家計に影響を与えうることは知っておくと参考になります。

## 住宅購入

結婚を機にこられる相談の場合、「選択肢が多い」という特徴があることはすでにお話しました。

妻の働き方だけでも選択肢がいくつあるわけですが、さらにその働き方によって住宅購入の金額にもおのずと幅が生まれます。このとき、教育費にお金をかけようと思えば住宅購入に回せるお金は減らさざるをえないかもしれません。その逆もしかり。究極は「収支のバランス」ですから、支出は合計額で捉える観点が大事になります。つまり、費目ごと単独で考えるには限界があるものです。常に費目をこえて横軸を通して考えることはライフプラン作成上、とても大切です。

住宅購入で覚えておきたいのは一発勝負である点です。ここが教育費などの費目のプランニングとは大きく異なる点でしょう。

どういうことかという点、住宅購入時には、多くの方が住宅ローンを組みます。20〜30年とそれは長い返済期間を設定することでしょう。その借入額は物件価格等によって決定されるわけですが、返済は長期に及んでも、借入額そのものは借り入れ当初に決まり、途中で変えることはできません。例えば教育費の場合、家計が厳しくなったから私立をやめて公立に方針転換する、塾や習い事をやめるといった選択肢がありません。住宅ローンではいったん組んでしまつたら、軌道修正することは基本的にできないわけです。すなわち、一発勝負ということです。

机上の計算ではありますが、結婚を機に

作成するライフプランでは、妻の働き方に合わせて住宅プランも考えることがとても多いです。

結婚したての時点では、買うことすら決まっていないこともあるかもしれません。そのような場合にはあまりガチガチに考えず、物件価格の目安を立てておくくらいに捉えるといいのではないかと思います。

### 生活費の設定

さて、教育費や住宅購入といった大きなライフイベントの話をしてまいりましたが、毎月の生活費の設定も実は非常に重要です。

結婚を機に相談に來られる場合、一つ悩ましいのが月の生活費をいくらと想定してシミュレーションするかです。結婚して一緒に暮らすようになってからあまり経過していないと、実態が分からない場合があります。特に共働きだとお互いに忙しく家計簿をつけていないこともあるでしょう。とはいえ、月2万円でも実際と乖離して見積もっていたら、40年で貯蓄額に1000万円近い差が生まれてしまいます。月々の差は小さくても、長期プランとなると、どうしてもその差は広がってしまうので、侮れません。

結婚したてで月の生活費がどうも見えにくい場合は、あわててシミュレーションするよりは、ある程度2人で生活をし、だ

いたいくらあれば生活できそうかメドを立ててからでも遅くはありません。

もし家計簿をつけるのがたいへんであれば、とにかくレシートをすべて持ち帰る癖をつけたいところです。レシートの出ないものは必ずメモを残しておき、ひと月たつたらすべてを足し算して合計額を出します。とりあえず費目は無視して構いません。口座から引き落とされる分も足せば、支出合計額は見えてくるはずですよ。

家計簿はレシートの転記ですから、元データであるレシートさえしっかり残しておけば、後から数字を追っかけることは十分可能です。

### 生命保険のプランニング

妻の働き方によって、実は生命保険のプランニングにも影響があります。それは夫の死亡保障額の設定です。



図表1 正規雇用 キャッシュフロー表 2015年末の預貯金残高300万円

西 暦		2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034	2035		
年 齢	夫 様	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50		
	妻 様	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48		
	第1子 様	-2	-1		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18		
	第2子 様	-4	-3	-2	-1		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16		
	家族のイベント	結婚 200		第一子誕生		第二子誕生					第一子小学入学		第二子小学入学				第一子中学入学		第二子中学入学	第一子高校入学		第二子高校入学		
	車検			車検		車購入	住宅購入		車検		車検		車検		車検		車購入			車検				
	上昇率		10		10		200	300		10		10		10		10		200			10			
取 入	給与所得 本人	0.5%	355	357	359	360	362	364	366	368	369	371	373	375	377	379	381	383	384	386	388	390	392	
	給与所得 配偶者		245	245	123	172	86	172	172	172	245	245	245	245	245	245	245	245	245	245	245	245	245	
	退職金 企業年金																							
	子供手当・児童手当																							
	満期保険金など																							
	不動産収入 (本人)																							
	不動産収入 (配偶者)																							
	公的年金 本人	0.3%																						
	公的年金 配偶者	0.3%																						
収入合計		600	602	481	532	448	535	537	539	541	616	618	620	622	624	626	628	629	631	633	635	637		
支 出	基本生活費	0.5%	168	168	181	182	195	196	197	198	199	200	201	202	203	204	205	206	207	208	209	210	211	
	車維持費	0.5%	35	35	35	35	36	36	26	26	26	26	26	26	26	27	27	27	27	27	27	27	27	
	住宅ローン								76	76	76	76	76	76	76	76	76	76	76	76	76	76	76	
	家賃・管理費・固定資産税等		100	100	100	100	100	100	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	
	生命保険料		12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	
	一時的な支出	0.5%	200	10		10		204	308		10		10		11		11		216			11		
	教育費	0.5%				65	66	71	81	73	86	91	83	66	58	64	77	84	88	112	97	106	91	
	その他の年間経費	0.5%	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	
	国内旅行・帰省	0.5%																						
支出合計		525	335	338	415	418	629	719	405	430	425	429	403	406	403	428	426	647	456	443	463	439		
収支		75	267	143	117	30	-93	-182	134	111	191	189	217	216	221	198	201	-17	175	191	172	198		
預貯金残高	0.5%	300	568	714	835	868	779	601	739	854	1,049	1,243	1,466	1,689	1,918	2,125	2,337	2,332	2,518	2,722	2,907	3,120		
	1.5%	300	568	720	848	890	810	640	784	907	1,111	1,317	1,553	1,792	2,040	2,268	2,504	2,524	2,737	2,969	3,185	3,431		
	2.5%	300	568	725	861	912	841	680	831	964	1,178	1,397	1,648	1,905	2,173	2,426	2,688	2,738	2,981	3,247	3,500	3,785		
割戻後残高	0.5%	300	565	707	822	851	760	584	713	820	1,003	1,182	1,388	1,591	1,797	1,982	2,169	2,153	2,314	2,488	2,644	2,824		

まとめ

死亡保障額をいくらに設定するかは、残された家族の収支に依存します。つまり、夫死亡後、妻が働けばその分、収入が確保されますから、夫の死亡保障額をおさえることができるわけです。

結婚してすぐに夫に多額の死亡保障は必要ないかもしれません。ただ、将来的に子供ができたときにはしっかりと検討したいところ。その際には、妻の働き方が影響することは覚えておくといいでしよう。

妻が働くことで家計の収入が増えることはもちろん、同時に生命保険料の節約にもなるので、まさに一石二鳥といえそうです。

結婚期のライフプランニングの特徴は「選択肢の多さ」です。ご自身でライフプランを検討して収支シミュレーションをするのであれば、根気よくいくつかのパターンをつくってみることをお勧めします。もしファイナンシャル・プランナーに家計診断をお願いするのであれば、さまざまな条件でのシミュレーションを依頼し、根気よく一緒に検討してくれる人を選ぶといいかもれません。

作成したキャッシュフロー表2つは、支出はほとんど変えず、妻の働き方によって収入を変えたものです（現実的には、前述のように妻の収入が変われば、支出も変わる可能性が高いですが、ここでは妻の収入の

図表2 パートタイム雇用 キャッシュフロー表 2015年末の預貯金残高300万円

西 暦		2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034	2035		
年 齢	夫 様	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50		
	妻 様	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48		
	第1子 様	-2	-1		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18		
	第2子 様	-4	-3	-2	-1		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16		
家族のイベント		結婚		第一子誕生		第二子誕生					第一子小学入学		第二子小学入学				第一子中学入学		第二子中学入学	第一子高校入学		第二子高校入学		
		200																						
		車検		車検		車購入	住宅購入		車検		車検		車検		車検		車検		車購入		車検		車検	
	上昇率		10		10		200	300		10		10		10		10		200				10		
収 入	給与所得 本人	0.5%	355	357	359	360	362	364	366	368	369	371	373	375	377	379	381	383	384	386	388	390	392	
	給与所得 配偶者		245	245								60	60	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	
	退職金 企業年金																							
	子供手当・児童手当																							
	満期保険金など																							
	不動産収入 (本人)																							
	不動産収入 (配偶者)																							
	公的年金 本人	0.3%																						
公的年金 配偶者	0.3%																							
収入合計			600	602	359	360	362	364	366	368	369	431	433	475	477	479	481	483	484	486	488	490	492	
支 出	基本生活費	0.5%	168	168	181	182	195	196	197	198	199	200	201	202	203	204	205	206	207	208	209	210	211	
	車維持費	0.5%	35	35	35	35	36	36	26	26	26	26	26	26	26	27	27	27	27	27	27	27	27	
	住宅ローン								76	76	76	76	76	76	76	76	76	76	76	76	76	76	76	
	家賃・管理費・固定資産税等		100	100	100	100	100	100	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	
	生命保険料		12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	
	一時的な支出	0.5%	200	10		10		204	308		10		10		11		11		216				11	
	教育費	0.5%							50	49	105	87	80	66	58	64	77	84	88	112	97	106	91	
	その他の年間経費	0.5%	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	
	国内旅行・帰省	0.5%																						
	支出合計			525	335	338	349	353	558	689	381	449	421	426	403	406	403	428	426	647	456	443	463	439
収支			75	267	20	11	10	-194	-323	-14	-79	10	7	72	71	76	53	56	-162	30	46	27	53	
預貯金残高		0.5%	300	568	592	606	618	427	106	93	15	25	32	104	175	251	306	364	203	234	281	309	364	
		1.5%	300	568	597	617	636	452	135	124	46	57	65	138	210	289	347	408	252	286	336	368	426	
		2.5%	300	568	603	629	654	477	166	156	81	93	102	177	252	333	395	461	310	348	403	439	503	
割戻後残高		0.5%	300	565	586	597	606	417	103	90	14	24	30	98	165	235	285	337	188	215	257	281	329	

差を見ていただくためにあえてほとんど変えないものとしてみました。図表1は妻が正規雇用で働くパターン。図表2は出産後しばらくしてからパートタイム雇用で働くとしたもの。数年後の貯蓄額に大きな差があるのはお分かりいただけるでしょう。

実際は、こうした表を作成した後、実生活を送っていく上で、どんな数値は明確になっていきますから、必要に応じて再シミュレーションを行うといいでしょう。数年に一度のペースで定期的にチェックするのでもいいですし、ライフイベントの節目にそれまでを振り返りつつ、将来設計するのも効果的です。

将来は誰にも分かりませんから、多かれ少なかれ私たちは不安を抱えて生きていくものです。それが、事前のシミュレーションによって少しでも軽減されるとしたら、そこにファイナンシャル・プランニングの意義があるのでしょうか。不安が増幅されやすい現代だからこそ、ライフプランニングを一人ひとりが真剣に考えていただけるといいなと思います。

今回は、子供の教育資金設計をテーマにお話いたします。